

「迷い子」の話

M · H

新しい子どもたちが入ってくる。新入園児にとって、この月は、もしかしたら、うろうろと心もとなく過ごす、「迷い子月」ではないだろうか。道がどう折れ曲っているのか、どこへ行ったらよいのか、皆目わからないままに、じっとしていることも出来ない。ただ、とことこと歩き廻る……。

しかし、考えてみれば、私どもも、また、折あるごとに「迷い子体験」をくり返しながら、今日まで歩いてきたと言えるかも知れない。幼児期の迷い子、青年期の迷い子、そして、老いを迎えるときも、人はまた、迷うのである。

◆

私たちが子どもだった頃、大通りを渡ったあちら側や、川の向こうは、果てしなく広がる見知らぬ街だったから、うっかり迷いこんだら、二度と家には帰れなくなりそうに思っていた。しかし、それでいて、私たちは、しょっちゅう、その未知の街に入りこんでみたいと憧れてい

たような気がする。薄暗がりの中に謎を秘めた見知らぬ世界は、いつも子どもだけに感受される特別の電波を送り出して、私たちを惑わし続けていたのかも知れない。

そんな誘惑に抗しかねると、子どもたちは、時折、通りを越え、橋を渡って行った。時には、ハメルンの笛吹き男が通り過ぎた跡のように、あたりの子どもたちが一斉に姿を消してしまつて、大人たちを驚かすこともあった。しかし、大方は、彼らは何とか帰り道を見つけ出し、思いがけない方角からひょっこりと現われて、心配していた大人を呆れさせるものだった。

「どこへ行つてたの？」

「どこつて？」

「こんなにおそくまで」

「おそかった？」

こんなとりとめのないやりとりの末に、大人たちは、こう付け加える。

「知らないところに行つちゃ黙目よ」と……。

しかし、子どもたちは、また、性こりもなく、どこかへ迷いこんでいくだろう。

未知という薄明かりに身を隠して、子どもたちとだけ密やかに音信を交わす、この惑わしの主を、「永遠の原母」と呼んだ人がある。私どもは、かつて、外界とも、あるいは他者とも、隔てられることのないまろやかな生を、穩かに充足して過ごしていた。たとえば、それを、母胎と不可分であつたあの未生以前の状態として考えることも出来るかも知れない。そんな時代への志向を、「母胎回帰願望」などと術語で把えることが流行っているが、「未知」への迷いこみを、一見、逆のように見えるこの願望を重ねて考えてみようというわけなのだ。

柳田国男が、『山の人生』の中で語っている幼い日の迷い子体験は、まさしく、こうした「母探し」の旅であつた。柳田は、その体験を、次のような一文で始めてい

る。

「これも自分の遭遇であるが、あまり小さい時の事だから他人の話のような感じがする。四才の春に弟が生まれて、自然に母の愛情注意も元ほどでなく、その上にいわゆる虫気があって機嫌の悪い子供であつたらしい。その年の秋のかかりではなかつたかと思ふ。」

(以下略)

四才の「私」は、ふと母親が目を放したすきに家を出て、県道を南に向かつてとことと歩き出したのであつた。三、四時間後に、二十何町離れた松林の中で発見され、幸いに顔見知りの農夫が連れ戻ってくれたが、「私」は、しきりに「神戸の叔母さん」の所へ行きたいとくり返していたという。もちろん、神戸には、彼の「叔母なる人」は在住しない。従つて、それは、恐らく、「私」の中で幻としてのみ存在する「母性的なるもの」であつたらう。弟のために失なわれた「母の優しさと甘やか

さ」、彼が愛して止まなかつた、そして、その愛の中に浸つて満ち足りていた、至福の時代への回帰願望、それが「神戸の叔母」という幻を生んで、彼を誘ひ続けたのであつた。従つて、見知らぬ世界へ出掛けていくという、いかにも遠心的な行動が、実は、「母なるもの」に回帰するという、極めて求心的な行動であつたりする。子どものもの、というより、人間の、というべきかも知れないが、こうした行動は、しばしば、見かけ上の意味を裏打ちする、もう一つの意味に支えられているものだ。「迷い子体験」などは、その典型例と言えるかも知れない。従つて、子どもたちは、自身の行為を充分に説明出来ないだらう。

「何故、そんな所に行ったの？」

「何故でも」

「何をするために？」

「何って？」

永遠に続くのは、こんなやりとりであろうが、子どもには説明のしようもない出来事であるに相違ない。「求心力」に誘なわれつつ、それを「遠心的行為」でも表現するという、この両義的な表出について、自身で合理的に把握しようすべもないのである。柳田は、それを、「神隠し」という絶妙のメタファで扱っている。

しかし、彼らの遠出と迷い子行が、遠心力の表現として、より素直に実行されることも珍しくない。すなわち、「新しい世界」の自力での探索という……。

堀辰雄は『幼年時代』という自伝的小説の中に、たかちゃんという仲よしの女の子と一語に遠出する挿話を挿入している。夏も終りに近いある日の午後、家人の午睡の際を見はからって、二人はソツと家を抜け出すのだ。この場合、幼い二人には、ちゃんと目標が定められている。たかちゃんの父親が働いているガラス工場まで、二人っきりで行ってみようというのだ。広い空地の向こう

には、大きな赤い煙突が見えかくれしている。それを目指して、旅を試みよう。しかし、水たまりだらけのその空地は、入りこんだ二人に、決して親切ではなかった。ちゃんと見えている煙突の方へ、容易に彼らを導いてはくれないのだ。水たまりを避け、足もとをかばいながら、うろろろと迷い歩くうち、二人には、それが、いじ悪な「魔法の煙突」のように見え始める。幼い二人にとって、この遠出は、少々、無謀すぎたのであろう。

結末は、とりあえずは、工場にたどりついた二人が、不機嫌な父に追われるようにして、再び、空地へと逃げこみ、情ない想いで家に帰り着くことで終る。しょんぼりと歩き続けながら、ふり返った二人の瞳は、ガラス工場の上に広がった黒い入道雲を、自分たちを脅かすものの不気味な正体のように把える。歩いても歩いても近づいてくれない煙突も、嵐を前触れする入道雲も、いずれも、彼らに対して敵意をむき出しにしている。「新しい世界」は、決して幼いものに優しくはないのだ。慣れ親んだいつもの庭先こそ、二人にとってふさわしい場所だ

というのだろうか。

しかし、一度、未知の中をさ迷い、新しい世界に目標を定めた彼らにとつて、以前と全く同じ時間は、回復され得べくもなかった。夏の終りのある日、あたり一帯を襲った洪水は、二人の住家を押し流し、それと同時に、たかちゃんも「私」は、不可分に過ごした二人の幼年期に別れを告げる。すなわち、避難する人々でごった返す大川端で、慌しく別れを告げて、それぞれの避難先へと散っていったのだ。以後、二人は、「男の子」と、「女の子」という別々の世界を、遠く離れた別々の場所できり広げることになり、ままごとと訣別した「私」は、絵草紙の魅力に取り付かれていく。

改めてふり返るとき、二人に訪れたあの「迷い子体験」は、慣れ親んだ既知の世界と、新しい未知の世界との境界を往還する、「間の体験」であったことに気付かされる。お父さんの働く場所を一目見たい、あの煙突の所まで二人だけで歩いて行こう、幼い二人がこう思い立ったとき、二人は既に、これまでの世界にだけ安住する

ことを許されない、新しい時の訪れを予感していたに相違ない。

子どもの国の地図の上には、無数の「未知」への入り口が書き込まれている。それは、必ずしも、通りの向こうや川の彼方とは限らない。かつてそのしるしは、人気がない森や朽ちかけた空家、あるいは土蔵や押し入れの中などにも付けられていた。いま、その入り口は、マンションの屋上や非常階段の踊り場に、また、砂利採取場の穴ぼこや空地に捨てられた冷蔵庫の扉に、そして時には休日のビル街やデパートの雑踏の中にまで、ポツカリと口を開いて彼らを招き入れるのだ。子どもたちは、アツという間に見えなくなってしまうと、時には、本当に戻ってこないこともあるだろう。

私たちが、情報知識を総動員し、経緯世界の網の目を隙もなく広げて、世界を「既知」で覆い尽くそうとするとき、子どもたちは、それら知り尽くされた風景の中を退屈げに歩き廻るかに見せながら、その裏側から発信さ

れる秘密の電波をいち早くキャッチし、こっそりとし
しを付けて、時の訪れを待つに相違ない。「ココニ、未
知へノ入りロアリ」と……………。

堀切直人は、その名著『迷子論』の中で、次のように
呟いている。

「『未知の土地』とかりそめに呼称しうるような特殊
の地帯がわたしたちの棲まうこの世界のどこかに実
在するのではないだろうか。この世界のどこかに――
いや、厳密に言えば、この世界をはずれたどこか
に、わたしたちの思ひもかけぬような別の世界が隠
れひそんでいるのではないだろうか。」

◆
新入園児にとって、新しい生活は、薄闇の中に果てし
なく広がる「未知の世界」であるに相違ない。しかし、
隙もなくあたりを覆い尽した情報の網の目は、子どもた
ちをも余さず包みこんでいるから、彼らは、新しい世界
に対して「ペタペタと『既知のしるし』を貼り付けてしま

う。旧く、「幼稚園に行ったら先生の言うことを聞く」、
「名前を呼ばれたら元気よく返辞をする」、旧く、「お弁
当を残さない」「やたらに泣かない」など……………。

しかし、一通りの情報知識でとりあえずは新しい世界を
覆い尽くしたとしても、類い稀な「未知発見家」である
子どもたちは、それこそ、知っている筈の風景の裏側
に、生々しく息づいている「未知」を感受して、戦おのき、
不安に脅えながらも、興奮して探索に乗り出さずにはい
られない。そして、よくわからない世界を、あてどなく
歩き廻るから、彼らは「迷い子」になる。一見、慣れ切
ったように、楽しげに遊んでいる彼らが、その実、うろ
うろと迷い歩いている「迷い子」であるとは……………。

しかし、あちらこちらと散々歩き廻るうち、その軌跡
はすべて「既知」としてしるしづけられる。その軌跡は
迷路状であればあるだけ、「既知」の範囲も広がるだろ
う。そして、それらの「既知」は、単なる情報知識によ
るそれと異なり、自身の身体で描いた地図であり、身体
で獲得した王国であるから、彼らを取り結ぶ関係は、充

分に親密で深く確かなのだ。

こうして、全体が混沌の海であった新しい世界に、「既知」の拠点が確保されたとき、既知の出現によって新たな「未知」が分泌され、双分化された世界は、その境界に新しい「迷い子領域」を用意して子どもたちを誘うだろう。堀切直人の眩きのように、この世界をはずれたどこかに「未知の土地」は隠れひそんでいるのかも知れない。しかし、子どもたちは、それを世界の果てまで探しに行くのではなく、常識的秩序の支配する日常世界のただ中で、容易に「未知」への入り口を発見し、軽やかに身を躍らせて、その世界へと足を踏み入れていくのではないだろうか。

